

「考えさせられる」葬儀(三)

葬儀をめぐる現状(社会問題としての葬儀 後編)

浄土真宗本願寺派総合研究所

浄土真宗本願寺派総合研究所では、「葬儀」について多角的な視点から調査・分析を行っている。僧侶は葬儀に関しては現場を持っているものの、社会や専門家、多様な僧侶の声に直接的あるいは間接的に接する機会が少ない。そこで、総合研究所では、「葬儀」の現状を考えるにあたり、

- ①HPや書籍など、各種メディアから発信されている声
- ②社会にあるさまざまな声
- ③葬儀現場に従事している専門家の声
- ④僧侶の声

を収集し、多角的に検証を行い、現代社会における僧侶や寺院のあるべき姿を模索している。

総合研究所では、②社会にあるさまざまな声について議論を深めるべく、2018年3月に、現代葬儀や墓に関する専

門家である小谷みどり氏(本願寺派総合研究所委託研究員、第一生命経済研究所主席研究員)を講師としてお招きし、小谷氏の近著『〈ひとり死〉時代のお葬式とお墓』(岩波新書、2017年、以下、本書と示す)をもとに、藤丸智雄(総合研究所副所長)との対談形式で研究会を実施した。本書の構成は以下のとおりである。

タイトル…『〈ひとり死〉時代のお葬式とお墓』

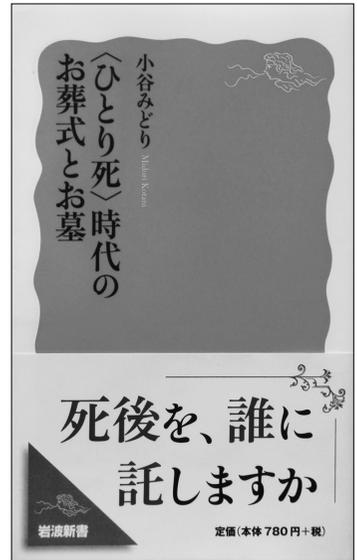
(岩波新書、2017年)

序 章 社会が変われば死も変わる

高齢社会がもたらしたこと／終活ブームなのか／「家族」が変わった など

第1章 何が起きているのか

お葬式の告別式化／宗教とお葬式／お墓は足り



ないのか など

第2章 お葬式は、どうなるのか

葬儀社頼みのお葬式／お布施／お葬式は、どうなるのか など

第3章 お墓は、どうなるのか

お墓と納骨堂の違い／お墓の引越し、改葬／なぜお墓を建てるのか など

第4章 〈ひとり死〉時代で葬送はどこへ

家族の限界／生涯未婚者が後期高齢者に／誰もが「ひとり」など

第5章 誰に死後を託すのか

迷惑をかけたたくない／死とは何か／人と人とのつながりのなかで など

前回（『宗報』7月号）は、上記の序章から第2章までの対談内容を報告した。

今回は、墓を取り巻く諸問題をはじめ、これからの葬儀の形態、お墓の今後、葬儀から見えてくる現代のコミュニティのあり方、人と人とのつながりの問題など、本書の第3章から第5章をふまえた対談内容を報告する。

第3章 お墓は、どうなるのか

環境問題から遺体の埋葬法は変わるのか

藤丸…イギリスなどでは樹木葬が一般化していると指摘されている。そうした流れの背景に「環境」への影響という視点がある。遺体を火葬すると燃料が必要な上、火葬時に環境に悪いさまざまな物質が出てきてしまう（本書126～128頁）。環境問題に配慮した遺体の埋葬法や納骨の形態についての視点は、日本では未だに希薄だが、今後考えるべき点であると感じる。特に、イギリスで始まっているコンポスト化¹という方法には驚かされた。

小谷…ヨーロッパでは、火葬は、遺体の中からダイオキシン・水銀など、投薬が原因と思われる悪い物質が発生してしまうことから、環境に配慮した方法がさまざまに検討されている。イギリスでは微生物などの力で土に戻していく遺体のコンポスト化が進んでいる。自然に優しい墓のあり方は日本人に受け入れられると思うが、火葬や土葬とは異なる遺体の埋葬法、例えばコンポスト化や、イギリスで検討されている遺体を茹でるとい

うような方法については、日本人の国民性にはなじまないのではないか。スウェーデンでは、遺体を冷凍して細胞レベルまで粉々にする方法が考えられている。これらの方法は、遺体は魂の抜けた抜け殻にすぎないという宗教を背景とする共通観念があるから可能なのではないか。

藤丸…元々一般的であった土葬はコンポストに似たようなものと考えられるのではないか。

小谷…しかし火葬が進んだ現在では土葬についての抵抗が強い。ムスリムが土葬を希望しても土葬できる場所が限定され困っている現実がある。九州では反対が強く、カトリックが以前土葬していた場所をムスリム向けに貸しているという事例がある。それほど、遺体についての考え方が異なる。もし、仏教の立場から公式に遺体についての統一的な考え方を発信できるなら、それをもとに環境に配慮した方法が選ばれるかもしれない。

藤丸…仏教では、教義的に遺体へのこだわりはないが、日本の伝統として遺体や遺骨を重視してきた経緯がある。僧侶としては、故人を偲ぶ方法がきちんと残っているという状況を大切にしたいと思う。仏縁が結ばれる場を大切に考えてはいるが、遺体の埋葬法などについて見解を出すのは現実的に行われないだろう。

小谷…2、3年前、ローマ法王が、カトリック教徒の「死に方」についての指針を提示された。火葬については既に認めら

れていたが、新指針には散骨はダメ、家に骨壺を置くのもダメ、などが示されている。これは、キリスト教の教義の上で「死者の再生」が不可能な埋葬形態を禁じたものだと思う。こうした宗教的な意味あいで「遺体」の取り扱いをするのであれば説明もつくが、仏教では「散骨や樹木葬でも問題ない」「従来のお墓が一番良い」など、宗教的な意味づけがお寺や僧侶によってそれぞれ異なる。今後の課題ではないか。

家族の範囲が変わり死者が忘却される

藤丸…続いて誰と一緒にお墓に入るのかという点について考えてみたい。本書の中で「妻と同じ墓に入りたくない」と考えている夫は7%弱であるのに対して、「夫と同じ墓に入りたくない」と考える妻は20%にのぼるといふ調査結果が示されている(本書106頁)。20%は大きな数字だ。このような調査結果を見ると、慣習を大事にしなくていい時代になれば、ますます「一族で墓に入る」という形態は薄れていくのではないか。

小谷…そうなると思う。見栄や世間体が無くなると、亡くなった人と遺された人との一対一の問題になる。人間関係が悪かったり薄かったりしたら、亡くなった人を弔とひついたという気持ちは弱くなる。そのため、葬儀も墓もいらないうことになる。

それに関連して、昨今は、死者が早いスパンで忘れられるようになっていけると感じる。その背景には、「家族」についての

観念の変化がある。一般の「家族」についての観念は変化しているが僧侶は変化しておらず、その差が大きいため、「娑婆」の考え方が理解できなくなっている。お寺は現代でもいわゆる「ハウズビジネス」を行っている希有な存在であり、かつ僧侶は昔ながらの「大家族」をイメージしている傾向が強い。善いか悪いかは別として、「大家族」のイメージは既に化石的なもの。例えば、いまの大学の学生に「誰が家族か」と尋ねると、祖父・祖母は「家族」ではないと答える。「では祖父・祖母は何か」と尋ねると「親族」と答える。つまり、学生にとつての祖父・祖母は、おじ・おばと同じ「親族」という関係として捉えている。おじ・おばに似た関係であれば、葬儀には行くだろうが、墓参りに頻繁に行くということはないだろう。その結果、死者を忘却するスピードが速まっている。葬儀には参列しても、墓へはお参りしないので、墓を建てるという意識も自然と希薄になる。

第4章〈ひとり死〉時代で葬送はどこへ

貧富とは無関係に丁寧に行われる葬儀の可能性

藤丸…経済的な問題と葬儀の形態との関係について考えてみたい。本書の中で、諸外国の葬儀のことが紹介されていて大変に興味深かった。日本の場合は、葬儀にかける費用によって宗教儀礼の内容まで変わってきてしまう傾向が強い。例えばネット

を見ると、「○○円以下は、戒名は無い」などと出てくる。しかし外国では、葬儀の負担が小さくなるように工夫されている。しかも丁寧に行われている。

小谷…例えば、マレーシアでムスリムの葬儀を経験した。町内放送のようなもので亡くなった人が出たことが地域に知らされる。すると、いろんな人が集まってきて葬儀・埋葬の準備がなされる。集まってくる人はお金を持つてくるが、それはモスクに寄付される。香典はないわけだが、遺族が負担するお金は埋葬に要する5000円のみだった。

台北市タイペイでは、連合葬祭という名前で、週に3日間、市が主催をして葬儀を行う（詳細は、本書146頁を参照）。市民でなくても申し込みは可能。墓地まで無料でついている。この葬儀は税金ではなく市民の寄付によって行われている。5年前から始まり、華人文化なので当初はきちんと葬儀をすべきという論調もあつたようだが、今は大人気となり定着している。そのため、当初は週1日だったが現在は週3日となっている。人気ととも寄付が多く集まるようになっていく。なかには大きな寄付をされる人もある。宗教者も無料で来ている。それどころか、台北市の偉い役人まで参列するなど、非常に丁寧な形で勤められている。日本だと安いと簡素な葬儀ということになるが、台北市の葬儀は違う。日本の行政の葬儀への関わり方とは全く異なっている。

藤丸…そうすると葬儀で支払う金額にかかわりなく、誰もがき

ちんとした葬儀をあげることができる。また、こうした葬儀の形式だと、日本のように葬儀のお布施^{ふせ}までも代金と見られてしまいう傾向が生じにくいだろう。

葬儀で結びついていた「つながり」は失われるのか

藤丸…少し話を戻すが、先程、「家族」でイメージされる範囲が小さくなってきているとご指摘をいただいた。「家族葬」の増加については、宗派の調査（第10回宗勢基本調査）からも明らかになっている。あえて、それで良いのだろうかと聞きたい。

かつては大家族的なネットワークや地縁があった。一方、現代では家族の単位が小さくなってきて、独居世帯も増加の一途を辿っている。このような一人ひとりの自立度が高くなっていく状況は、豊かさとは裏ではないか。以前は、大家族的な人間関係、あるいは地域社会のネットワークで支え合う必要があった。しかし、豊かさによって誰にも頼らない生き方が可能になった。

例えば葬儀の場合、かつて集落で協力して遺体を運ばなければならなかったり、埋葬をしなくてはならなかったりと協力が不可欠だった。現在はそのほとんどを業者が代替してくれる。しかし、今後も、それが続けられるのか。あるいは可能であったとしても、それで果たして良いのか。確かに家族の中で深刻な問題が発生しやすい。以前のように大家族で構成される社会

に戻れば良いとまでは思わないが、葬儀や墓に象徴されるような人と人とのつながりの変化については検証が必要ではないか。

小谷…山間部の集落に調査に入ると、地縁が機能していないことがわかった。都会に住んでいると、田舎には人のつながりがあるとイメージしてしまいが、地縁は幻想のようなものだと感じるものがよくある。経済的に厳しい地域だと助けあいのつながりが必要なのは間違いないが、そうでない地域では、地域の人間関係を煩^{わづ}わしく思っている人も多く、自立できる環境を求めている。しかし問題なのは、自立できたとしても、「寂しい」「悲しい」「誰かに話を聞いてもらいたい」など、お金では解決できない不安や悩みであり、それを支えあうような何か新たに希求されているという点だ。

地縁からテーマ・コミュニティへ

参加者A…地縁が機能していないと考えると、葬儀や法事を協力しあう従来の地域社会のあり方は、現代社会において希求されているような関係ではなかったということか。

小谷…そのとおり。日本の地域社会は基本的に監視社会的なものがあり、葬式の香典帳などはその典型的なものといえる。もらったものと同等のものを返さなくてはならないという決まり事を守るためのもの。例えば町内会は日本独特で、いわば戦時中の隣組のようなものと考えられる。助けあうことで豊かな社

会をつくりましょうという発想でできていない。同質性も要求される。そのため、世の中が豊かになり自立が可能になるとともに、つながりが切られていった。

そもそも、地縁があるから仲良く協力できるのかという問題が根本にはある。今後、縁の問題は一層変化するだろう。

藤丸…それでは、今後どのようなつながりが求められているのか。

小谷…これまで、地縁や血縁、社縁など、さまざまなつながりがあったが、これらは既に崩壊してしまった。代わりに現在では、「テーマ」によるコミュニティが注目される。趣味が同じ、同じ社会活動に参加しているなど、共通した「テーマ」によるつながりが育まれて^{はぐく}いる。宗教もある種のテーマ・コミュニティではないか。浄土真宗のつながりも、みなが阿弥陀さまに向かい手を合わせるという意味では、テーマ・コミュニティの一つだろう。

第5章 誰に死後を託すのか

「手間」と「迷惑」

藤丸…人と人とのつながりについて、本書の中に「手間をかける」ということと迷惑をかけるということは違う」（本書195～196頁）という言葉が出てくる。人間のつながりについて非常に示唆深い考え方だ。「手間」と「迷惑」とが違うとは、どういう

ことか。

小谷…幼い子どもが寝小便をして布団を干さなくてはならないことを、親が「迷惑かけられた」と普通は思わない。今の終活は、子どもに迷惑をかけないようにと考えている人が多い。子どもに葬儀のことをやってもらうことが、「子どもに迷惑をかける」と発想してしまうような人間関係になっている、そういう親子関係になっていることが問題ではないかと言いたかった。多くの人は、大切な方にかける手間を迷惑とは思わないはず。かけがえのない関係を築けるかという問題提起の意味がある。

葬儀問題を通して、生き方を考える

藤丸…本書では全体を通して、人間の「生死」の本質的な問題に触れながらまとめられている。人間は、生まれた時からしばらくの間と死ぬ時には、必ず人の手に頼らざるを得ない。そこには与えあい支えあう布施の心が生じてくる。やはり葬儀の変化について、現代社会における心の問題として捉えなくてはならないと強調されているように感じた。

小谷…現代は、自分の葬儀や墓をどうしたいのかを考える人が増えたのは確かなこと。それは不安だから。今は、お金を払えば葬儀は葬儀業者がやってくれるし、介護もやってもらえる。ほとんどのことは一人でできるが、不安や孤独などの問題は残る。家族がいても安心できない。この安心をどう確保するのか

が難しい。これだけは、お金で買うことができない。

自分の死後の安寧^{あんねい}を保証してくれるものが得られないことが不安につながっていると云える。死後、自分はどうなるのか、亡くなった後にどのように記憶されていくかについて確認があれば、不安に思う人が減っていくのではないか。葬儀や墓の変化という現象面にとられるのではなく、どうしてこのようなことを多くの人が考えるようになったのか、心の問題を大切にしたい。

この点に関しては、社会の問題もあるが、僧侶のあり方にも問題があると考ええる。西方浄土^{さいほうじょうど}に生まれていくということを僧侶が本気で思い本気で伝えていけば、このような不安な状況を変えていくことができるのだろうと思う。

おわりに

後半では、遺体の埋葬法の問題、お墓の問題、外国における葬儀、葬儀に象徴される「つながり」の問題、そして葬儀の変化の背景にある心の問題がテーマとなった。実に多様な視点から話題が提供されるとともに、葬儀・墓の変化、コミュニティの変化、現代人の抱える^{かか}心の問題と、次第に問題の奥深い部分にまで掘り下げられていった。

我々僧侶はこれまで、葬儀や墓に関する急速な変化にとまどい、焦りから、その変化をどのように止めるかという応急措置

にばかり意識が向いていたように思う。しかし、その背景にあるのは人びとの根本的な不安であり、我々の意識とは裏腹に本質的な意味で、切実に宗教が求められ続けている。そのことを現象の向こう側に見なくてはならないように感じられた。

それともう一つ感じたのは、現在の変化は、途中経過でしかないということである。諸外国の例などを見ると、まだまだ変化は続くのではないか。その変化を傍観視するのではなく、その背景にある不安や悩みに向きあうことで、より本質的な意味での救いや安心が回復された葬儀を創出していくような営みが生まれてくるのではないか。変化に対応するだけでなく、変化を作り出すような何か、仏教界のどこかで生まれてくることを期待したい。

今回の研究会で使用した小谷先生の『〈ひとり死〉時代のお葬式とお墓』は、この報告で紹介できなかった数多くのデータが掲載されており、まさしく「考えさせられる」内容となっている。

〈筆耕・構成〉 那須公昭

富島信海

i 「一般的には、生ごみなどを微生物や菌などの作用で発酵させ、堆肥として循環させることをコンポスト化という」(本書126頁)。海外では、土葬でも火葬でもなく、環境に配慮した方法を提案する団体や会社が続々と出てきている。その方法の一つが、遺体のコンポスト化であるという。